慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第11講：言語哲学
Sub Title	
Author	石川, 史郎(Ishikawa, Shirō)
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	理系の西洋哲学史；哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.267- 286
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学理工学部大学院講義ノート
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000-0267

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第 11 講

言語哲学

「理系の西洋哲学史」 目次; 他

本章で, いよいよ言語哲学に突入する.

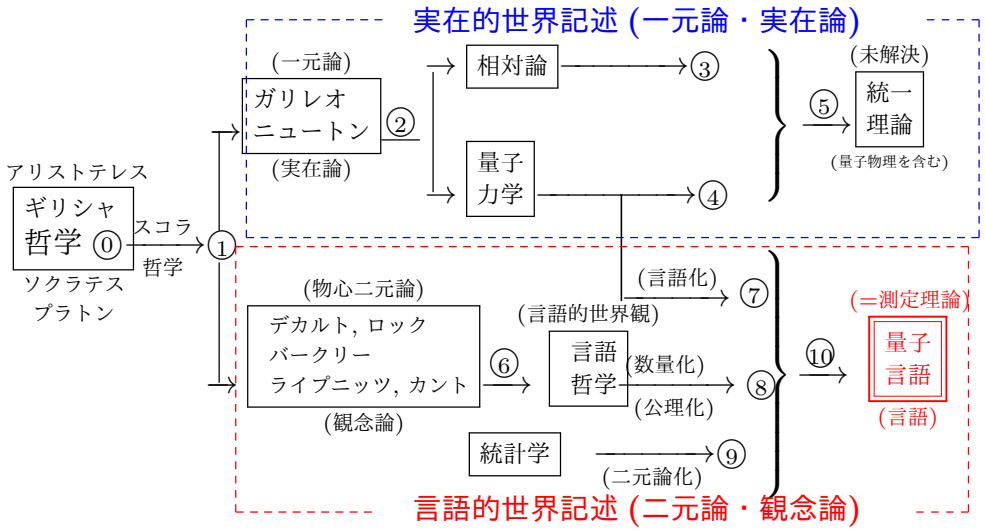


図 1.2 [世界記述史の中での「量子言語の位置づけ」(主張 1.2)]

(注 ; カント以前の物心二元論も物理以外のものという意味で一括して観念論に属するとした; 9.1 節 [J. ロック] 参照)

カントによって, 認識論が完成された. ということは, 「認識論の賞味期限が切れた」と同じことで, 次にウィトゲンシュタイン等の言語哲学が台頭する. すなわち, 西洋哲学の世界記述の部分 (二元論的観念論) は大雑把に言うと, 次の発展 :

$$\underset{(\text{プラトン})}{\boxed{\text{イデア論}}} \xrightarrow[\text{コギト転回}]{} \underset{(\text{デカルト})}{\boxed{\text{物心二元論}}} \xrightarrow[\text{コペルニクス的転回}]{(\text{観念論化})} \overset{(\text{本当の観念論})}{\underset{(\text{カント})}{\boxed{\text{二元的観念論}}}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \underset{(\text{ウィトゲンシュタイン})}{\boxed{\text{言語哲学}}} \tag{11.1}$$

だけである. したがって, (4 人の大哲学者の内の一人である) ウィトゲンシュタインの業績は最大限に称えられるべきであるが, 20 世紀初頭は「物理学」の時代であって, ウィトゲンシュタインがカントのように (または, アインシュタイン) のように, 「時代を象徴する人物」として受け入れられたわけではない. そうだとしても,

「心」は真の哲学的テーマになり得ない

と気づいたのはウィトゲンシュタインである．すなわち，

真の哲学的テーマは「言語」である

と主張してくれたのだから, 量子言語にとっては, ウィトゲンシュタインが最重要人物であることは確実である． 本書の立場から, 多少修正すると；

真の哲学的テーマは「二元論的言語」である

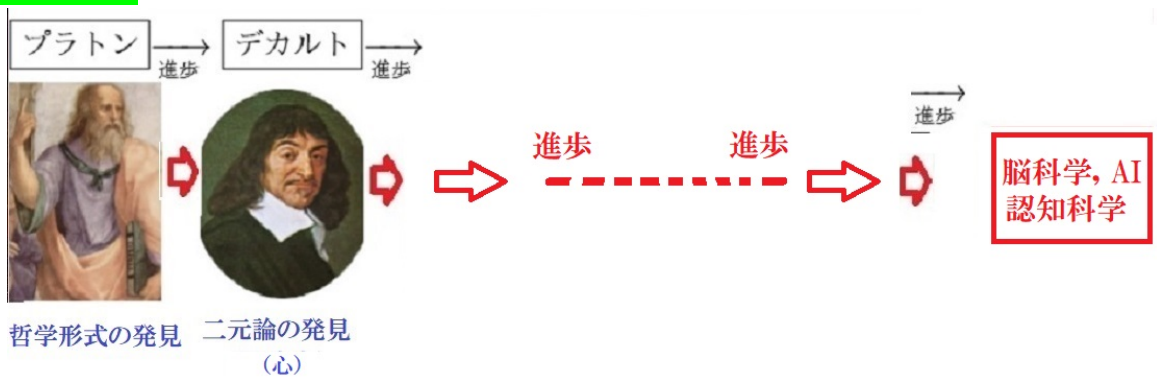
であり, これならば,「二元論」という言葉を通して, プラトン, デカルト, カント, ウィトゲンシュタインを繋げることができる.

11.1 言語論的転回『 論理哲学論考』

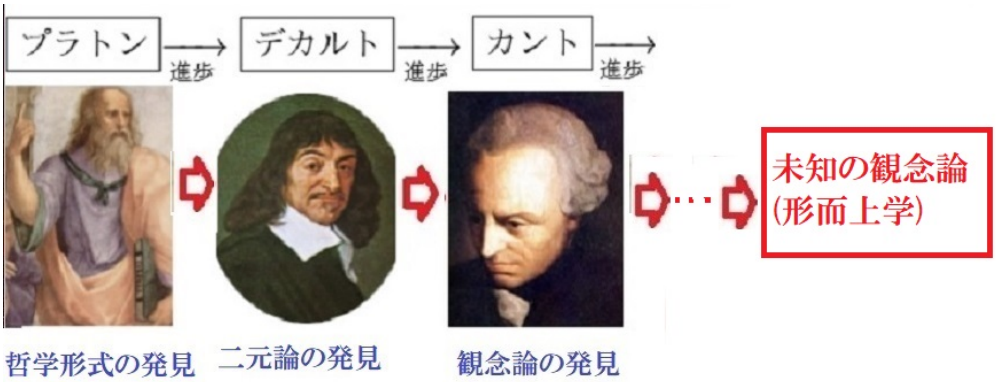
11.1.1 ホーキング博士とウィトゲンシュタイン

前節で我々は, 次を主張した.

哲学は科学の未熟な状態ではない．その行き先は実験科学ではあってならないので, 次を不採用とする：



カントはこの流れを阻止するために, コペルニクス的転回 (観念論の発見) を宣言して, 次の方向を示した：



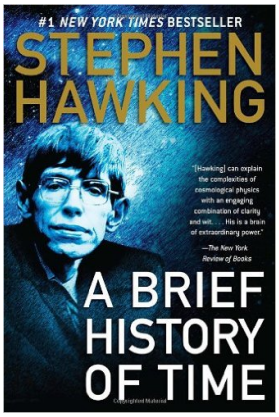
そうならば, 我々は, 二元論的観念論の本流として, 次を 採用 とする：

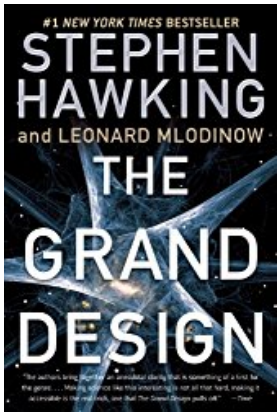
これを以下に説明する.

上の根拠がウィトゲンシュタイン等による言語哲学：

$$\underset{\text{カント}}{\overset{\text{超越的}}{\boxed{\text{認識論}}}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \underset{\text{ウィトゲンシュタイン}}{\overset{\text{言語ゲーム}}{\boxed{\text{言語哲学}}}}$$

である. 本講でこれを説明する.





ケンブリッジ大学の物理学者ホーキングは,「ホーキング博士, 宇宙を語る (A brief history of time):[21]」(世界で 1000 万部のベストセラー) の中で,

(A) １９世紀と２０世紀には, 科学は哲学者, いや少数の専門家以外の誰にとっても, あまりに技術的, 数学的になりすぎた. 哲学者は探求範囲を大幅に縮小し, 今世紀のもっとも有名な哲学者のひとりであるウィトゲンシュタインが,「哲学に残された唯一の任務は言語の分析である」と言うほどになった. アリストテレスからカントに至る哲学の偉大な伝統からの, これはなんという凋落ぶりだろう！

と述べている. これから, すくなくとも次の事実は認めざるを得ない.

(B_1) ホーキング博士ほど優秀な学者に, 哲学をわかるように説明できる哲学者が世界中探しても一人もいない.

なぜならば, もしそういう哲学者がいたならば, 直ちにホーキング博士のところに出向いてウィトゲンシュタイン哲学を説明すると思うし, 当然ホーキング博士も聞く耳を持っているに違いないからである. 一流を自認をする哲学者ならば, 他分野で影響力を持つ研究者に哲学の意味をしっかりと伝えるべきと思う. また次もわかる.

(B_2) ホーキング博士はカントを読んでいない.

なぜならば, ホーキング博士を感心させるようなことをカントは一言も言っていないと思うからである.

11.1.2 ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』

ウィトゲンシュタイン（1889 年 - 1951 年）は, ２０世紀の最も有名な哲学者で, 前期には『論理哲学論考（1921 年)』を著し, 後期の『哲学探究（1953 年)』で「言語ゲーム」という言葉を流行させた. 同時代の「世界を動かした理論」, すなわち,

(C_1) アインシュタインの一般相対性理論（1916 年）
(C_2) ハイゼンベルグ, シュレーディンガー, ボルン:量子力学 (1925,6 年)
(C_3) フィッシャー統計学:『Statistical Methods for Research Workers』（1925 年）
(C_4) ゲーデルの不完全性定理（1930 年）
(C_5) フォン・ノイマン:『量子力学の数学的基礎』（1932 年）
(C_6) コルモゴロフ :『確率論の基礎概念』（1933 年）
(C_7) ケインズのマクロ経済学（1936 年）

等の「世界を動かした理論」と比べたら,「論考」は見劣りすると思う. 「見劣り」というよりも,

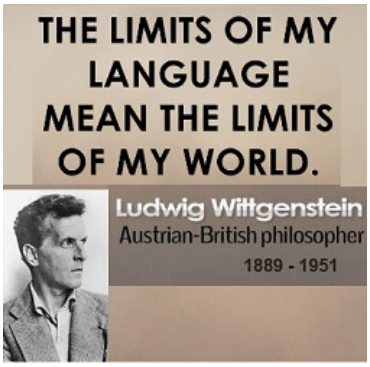
(D) ホーキング博士ほど優秀な学者に,「論考」をわかるように説明できる哲学者が世界中探しても一人もいない

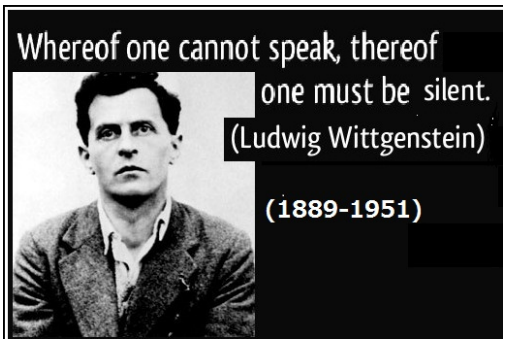
というのでは,「優れているか否か？」以前の問題だろう． ホーキング博士ならば,「論考」以外 ((C$_1$) - (C$_7$)) ならば, その価値・意義を直ちに理解すると思うからである.

11.2 哲学者の資質は, 言葉の力

11.2.1 私の言語の限界が, 私の世界の限界

しかし, 本書的には, ウィトゲンシュタインは偉大な哲学者であって欲しい. なぜならば, ウィトゲンシュタインの下の言葉 (E_1) - (E_3) を残したからである.





(E_1) 私の言語の限界が, 私の世界の限界
(E_2) 語り得ぬものについては 沈黙しなければならない
(E_3) 言語ゲーム

等の珠玉の言葉である. こういう言葉を聞くと,

哲学とは, キャッチコピーのこと

なのだと納得してしまう.

(E_1) ならば, 当然, 「(E_1'): あなたの言語の限界が, あなたの世界の限界」なわけで, 「言語によって世界が異なる」ことを意味している. たとえば, 数学という言語では「地球は太陽の周りを回っている」という命題は記述できないが, ニュートン力学という言語ならば記述できる.

「量子言語の精神」の説明のために著者が駄文を 1000 ページ書き連ねるよりも,

(F)「ウィトゲンシュタインも上の (E_1) - (E_3) のように言っている」

と一行書く方がはるかに勝るからである. ウィトゲンシュタインの『哲学探究 (1953 年)』で「言語ゲーム」という言葉を知れば, 誰だって

(G_1) 言語ゲームが言語活動の本質だとしても, その代表的なモデルは何か? 「((E_1) の) 私の言語」とは何か? それを言わなければ, 役に立たないだろう.

すなわち,

(G_2) ウィトゲンシュタインは「私の言語（=言語体系・世界記述法)」を提示しなかった (提示できなかった).

したがって,「語り得ぬもの」の意味が明確化できなかった. ウィトゲンシュタインの名言「語り得ぬものについては, 沈黙しなければならない」は半分正しいが, 半分は不十分と思う[*1]. 量子言語の立場から言えば,「語り得ぬものがあったら, それを語り得るような言語を作らなければならない. もしそれが不可だったら, 今度こそ沈黙しなければならない」である. 科学の枠組みがはっきりしていないとは信じがたいことかもしれない. しかし,

- 「時制」,「我 (=自分)」とかは科学で語りえることか語りぬことかが明確でなかったので, それを明確にするために量子言語が提案された

である.

前述のように, ホーキング博士に

(H) ウィトゲンシュタインが,「哲学に残された唯一の任務は言語の分析である」と言うほどになった. アリストテレスからカントに至る哲学の偉大な伝統からの, これはなんという凋落ぶりだろう！

What a comedown! (なんと落ちぶれたものだ!)

と言われたとしても,「言語の分析」を「言語の作成・提案」と言い換えれば, ホーキング博士の哲学に対する認識もかなり変わったと思う. 大物理学者の使命も言語を作ることで, ニュートンはニュートン力学という言語を, アインシュタインは相対性理論という言語を作ったのだから.

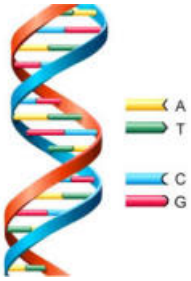
結局, 本書的には, ウィトゲンシュタインは, 言語 (量子言語) を提案しなかったけれど, 量子言語の精神を表すために珠玉の言葉 (E_1) - (E_3) を用意しておいてくれたと思いたくなる. 量子言語にとって恩人という意味で, 本書ではウィトゲンシュタインを 言語 (哲学) の発見者 とする.

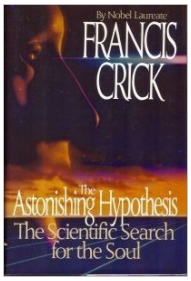
11.2.2 「人々の心」と「我」

以下に, 注釈 9.2 と 9.7 節で述べたクリックの著書「驚くべき仮説 (The astonishing hypothesis)」を再掲しておく.

> 20 世紀の科学はいろいろあるにしても, 3 つ挙げるとしたら相対性理論, 量子力学, DNA 二重らせん構造の発見 (ワトソンとクリック (Francis Click)) と思う.

[*1] 光速度不変は量子言語では記述できない.





クリックの著書「驚くべき仮説 (The astonishing hypothesis)」の冒頭に,

($\sharp_1$) 人々の心のいろいろな現象 – 喜び, 悲しみ, 記憶, 志, 自我, 自由意志等 – は非常に多くの分子と細胞の相互関係の表現に過ぎない

と述べている. 今から思えば当たり前の発言で, どこが「驚くべき仮説」か分かりにくいかもしれない.

クリックは「物一元論」の立場なので, 書名を「驚くべき仮説」としたのだろう. 「(デカルトの実体二元論を完全否定するほどの) 驚くべき仮説」という意味と思う. 人々の心は科学的テーマである. したがって,

「人々の心」は真の哲学的テーマになり得ない

という意味で「驚くべき仮説」なのかもしれない. 混乱を避けるために, 念の為, 本書 (=量子言語) の主張をまとめておくと,

($\sharp_2$) クリックの言う通りで, 人々の心とかの現象なんて, 実在的物質的現象でしかない. (世界は一元論的)
しかし,
人々の心とかの現象を記述するのは, 「我」を想定した二元論的言語 (=量子言語) である (理解は二元論)

となる.

よって, 認識論に二つの方向 (科学コースと観念論コース) があることになる：

$\boxed{\text{デカルト}} \longrightarrow \boxed{\text{認識論}} \longrightarrow$

(「我」の発見)　(「我」と「人々の心」の混同)

$$\longrightarrow \begin{cases} \text{科学コース（「人々の心」）} \longrightarrow \boxed{\text{脳科学}} \\ \text{観念論コース（「我」）} \longrightarrow \boxed{\text{言語哲学}} \longrightarrow \underset{\text{(特に,「我（一人称）」の言語)}}{\boxed{\text{量子言語}}} \end{cases}$$

である.

我々は, カントの「観念論の発見 (コペルニクス的転回)」を継承する立場で, もちろん, 観念論コースを目指す.

11.3 言語論的転回で蘇る純粋理性批判

11.3.1 一括置換 (純粋理性批判から量子言語へ)

しかし, ウィトゲンシュタイン等によって成された言語論的転回, すなわち,

$$\underset{\text{デカルト=カント}}{\overset{\text{超越的}}{\boxed{\text{認識論}}}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \underset{\text{ウィトゲンシュタイン}}{\overset{\text{言語ゲーム}}{\boxed{\text{言語哲学}}}}$$

によって, 以下のように『純理』を分かったような気分にさせてくれる.

カントの『純理』をワードでタイプして,「認識」を「言語」に一括置換すればいい. すなわち,

$$【認識】 \xrightarrow{\text{一括置換}} 【言語】$$

とすれば,「純理の精神」は「量子言語の精神」にただちに変貌する. 以下に, これを見よう (*cf.* [13]).

説明 11.1. エンカルタ百科事典的説明 10.4 の量子言語版の説明

以下を,【量子言語 (説明 11.1)[純粋理性批判 (説明 10.4)]】として, 説明 10.4 と説明 11.1 を見比べて読んでもらいたい.

【量子言語[純粋理性批判]】で明らかにされたのは, 人間の【言語[認識]】能力は, 世界の事物をただ受動的に【記述[模写]】するだけではなく, むしろ世界に能動的にはたらきかけて, その【言語[認識]】の対象をみずからつくりあげるということである. つくるとはいっても, 世界を無からつくりあげるわけではない. 世界はなんらかのかたちですでにそこにあり,【言語[認識]】が成立するには, 感覚をとおしてえられるこの世界からの情報が材料として必要である. しかし, この情報はそのままでは無秩序な混乱したものでしかない. 人間の【言語[認識]】能力は, 自分に本来そなわる 言語ルール (言語ルールと 2)[一定の形式 (=アプリオリな総合判断・認識)] をとおして, この混乱した感覚の情報に整然とした秩序をあたえ, それによってはじめて統一した【言語[認識]】(= コペンハーゲン解釈[(=ポステリオリな認識)]) の対象をまとめあげるのでなければならない. 【量子言語[純粋理性批判]】によれば,【言語[認識]】にそなわるその形式とは,

(B_1)【測定に関する言語ルール 1[感性の形式]】

(B_2)【因果関係に関する言語ルール 2[悟性の形式]】

である.

そうだとすれば,「すべての物は時間と空間のうちにある」とか「すべては因果関係にしたがう」という命題は経験的には証明できないにもかかわらず, すべての経験の対象に無条件にあてはまることになる．というのも, 空間や時間や, 因果関係といった形式によってはじめてその対象が構成されるからである．それはたとえば, すべての人間が【緑という言葉しか使えない[緑のサングラスをかけた]】場合,「世界は緑である」という発言がすべての人間にとって正しい発言とみなされるのに似ている．

すなわち,

$$\underset{\text{(認識が先で, 世界が後)}}{\overset{\text{コペルニクス的転回}}{\boxed{\text{純粋理性批判の説明}}}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \underset{\text{(言葉が先で, 世界が後)}}{\boxed{\text{量子言語の説明}}}$$

である．

次は補遺 1.4 の再掲である．

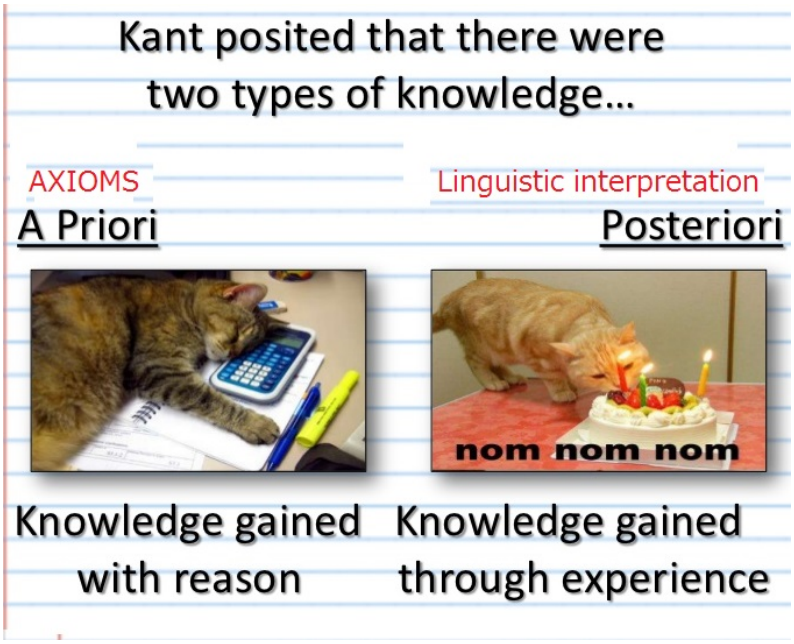
補遺 11.1. (=補遺 1.4) **[カント哲学]:** カント哲学の

- **ア・プリオリな認識 (総合判断)** :実験検証できないにもかかわらず，すべての経験の対象に無条件にあてはまる命題
- **ポステリオリな認識**: 経験を通して会得できる知恵

を，測定理論の [言語ルール 1 と言語ルール 2] と対応させたくなる．つまり,

$$\underset{\text{(カント哲学)}}{\boxed{\text{ア・プリオリな認識}}} \overset{\text{(対応)}}{\longleftrightarrow} \underset{\text{(量子言語)}}{\boxed{\text{言語ルール 1 と 2}}}$$

$$\underset{\text{(カント哲学)}}{\boxed{\text{ポステリオリな認識}}} \overset{\text{(対応)}}{\longleftrightarrow} \underset{\text{(量子言語)}}{\boxed{\text{言語的コペンハーゲン解釈}}}$$



カント哲学と量子言語は，共に形而上学的世界記述法の確立を目指しているのだから，ある種の対応があってもよいだろう． カント哲学も量子言語も共に二元論の確立を目指したのだから, しかも量子言語の二元論は誰でもわかるのだから, 量子言語がわかれば, カント哲学（純粋理性批判）がわかったような気分になることができる．しかしながら, 文芸的側面を無視する立場から言うと, 量子言語を知っていればカント哲学は不要である．
Cf. [コペンハーゲン解釈；量子哲学. 534 pp.] [KOARA 2018; コペン]

////

総括 11.2. 結局, 次の図式を得たことになる．

$$
\begin{tikzcd}
\boxed{\text{カント以前}} \arrow[r, "\text{観念論化}", "\text{認識論的コペルニクス的転回}"'] & \overset{\text{アプリオリ}}{} \quad + \text{ポステリオリ (経験知)} \quad \boxed{\text{カントの観念論：純理}} \arrow[d, "\text{言語論的転回}"] \\
\boxed{\text{量子力学}} \arrow[r, "\text{言語化 (1.1 節の (1.2) 式)}", "\text{言語論的コペルニクス的転回}"'] & \text{言語ルール} \quad + \text{コペンハーゲン解釈} \quad \boxed{\text{量子言語}}
\end{tikzcd}
\tag{11.2}
$$

(世界が先で, 認識が後)　(認識が先で, 世界が後)
(世界が先で, 言葉が後)　(言葉が先で, 世界が後)

そうならば, **コペルニクス的転回** とは,

- 実在論から観念論を作り出す操作

である．
(カント以前が実在論とは言えないかもしれないが, 「観念論」の意味が, 心, 霊的等様々であっ

た．)

純理が高い評価を得ているのは,

コペルニクス的転回という操作が観念論の肝であること

を強調したからである．しかし,「純理」は役に立たないが,「量子言語」は諸科学を記述する言語として, 統計学以上に役に立つことに注意せよ． すなわち, 認識論的コペルニクス的転回は役に立たないけれど, 言語論的コペルニクス的転回は役に立つ.

これでやっと **コペルニクス的転回** がわかった

ことになる.

まとめ 11.3. [イギリス経験論, 大陸合理主義, カントの折衷案] の言語論的転回
「認識」ではなくて,「言語」を想定するならば, いろいろな言語体系（日常言語, 数学, ニュートン力学, 量子言語, ・・・）のなかで,

($\sharp_1$) 日常言語はイギリス経験論的である (*cf.* 注釈 9.3)
($\sharp_2$) 数学は大陸合理主義的である (*cf.* 注釈 9.7)
($\sharp_3$) 量子言語はカントの折衷案的である

と言える． 量子言語には, 言語ルールが初めに決められているので,「生得的」で,「タブラ・ラーサ（白紙)」でない．また, 経験を通して【記述力 (言語的コペンハーゲン解釈)】が徐々に形成されていくわけで, カントの折衷案的である.

♠ **注釈 11.1.** 【なぜ認識が可能か？】と問われても,「人間の認識能力の驚異」とか「将来に発展するであろう脳科学の成果を待って」と言うしかないわけで, これをカントは高尚な感じがする「超越的」という語で表現した． 【なぜ言語が成立するのか？】と問われても,「人間の言語能力の驚異」とか「将来の脳科学で」と言うしかないわけで, これをウィトゲンシュタインは身近な感じがする「言語ゲーム」という語で表現した．すなわち,

$$\underset{\text{デカルト＝カント}}{\overset{\text{超越的}}{\boxed{\text{認識論}}}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \underset{\text{ウィトゲンシュタイン}}{\overset{\text{言語ゲーム}}{\boxed{\text{言語哲学}}}}$$

である.

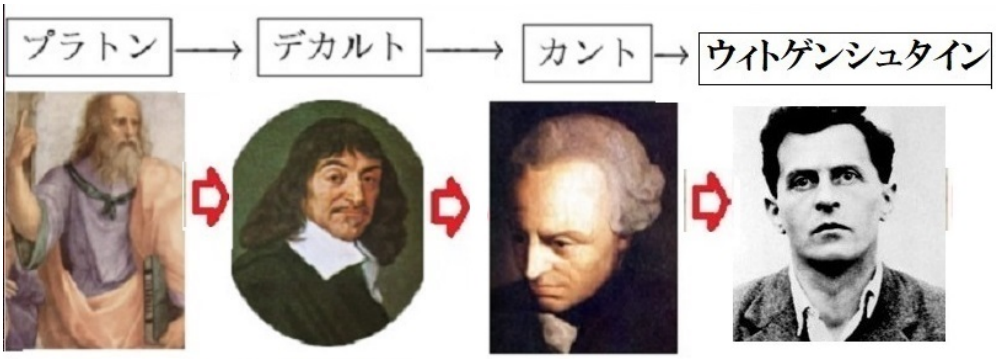
♠ **注釈 11.2.** さて, ここまでで, 次の分類を得る (*cf.* 主張 1.4[哲学者の仕分け]).

$$\begin{cases} (\flat_1): \text{実在的世界記述 (物理学)} \\ \quad \text{アリストテレス, アルキメデス, ガリレオ,} \\ \quad \text{ニュートン, アインシュタイン, ・・・} \\ \\ (\flat_2): \text{空想的言語的世界記述 (西洋哲学の本流)} \\ \quad \text{プラトン, スコラ哲学, デカルト, ロック,} \\ \quad \text{ライプニッツ, バークリー, ヒューム, カント,} \\ \quad \text{フッサール, ウィトゲンシュタイン} \\ \\ (\flat_3): \text{科学的言語的世界記述 (統計学・量子言語)} \\ \quad \text{パルメニデス, ゼノン, ベルヌーイ,} \\ \quad \text{統計学, 量子言語} \end{cases}$$

である.

主張 11.4. [奇跡] ここで,

(C_1) 西洋哲学の本流：



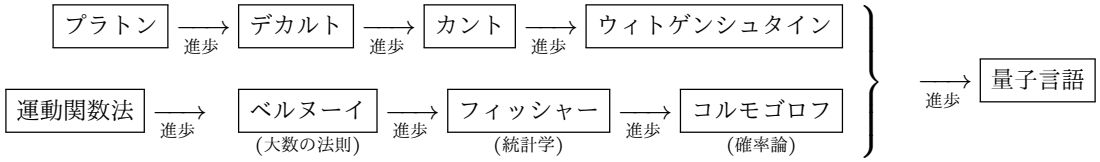
の目的が「二元論的観念論を究めること」

であるとするならば, 同じ意味で,

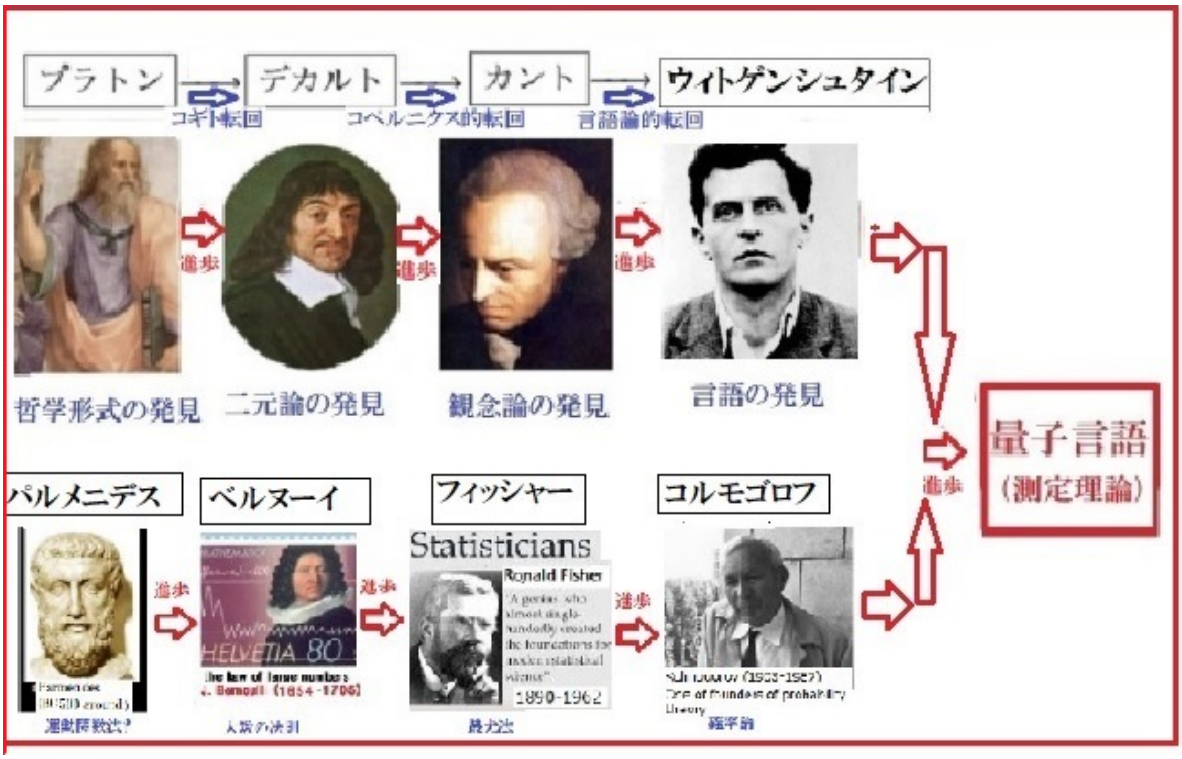
(C_1) 「進歩の基準・尺度を量子言語に近づくこと」

と定義すると, 次を得る：

したがって, 次の [奇跡] が起こったことになる.



すなわち,



- 文学・文芸である空想的言語的世界記述 (西洋哲学の本流) と科学の記述法である科学的言語的世界記述 (統計学) が量子言語として合流するという [奇跡] が起きる.

哲学は文芸的には様々な観点があるわけで, そしてこの「様々さ」こそ文学部哲学科の哲学の魅力なのかもしれない. . しかし, 文芸を排除した立場からは, 結局, 空想的言語的世界記述と科

学的言語的世界記述は二元論的観念論を究めるための歴史だったと言える.

11.3.2 ウィトゲンシュタインは何をやったか？

「まえがき」でも書いたように，本講の論法はすべて「量子言語」からの逆算である． すなわち，

- 「量子言語が二元論・観念論のお手本とする」ならば，〇〇理論は二元論・観念論と見なせるか？

と考える． そうだとすると, ウィトゲンシュタインの言語論的転回：

$$\boxed{\text{カントの認識論}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \boxed{\text{言語哲学}}$$

同じことで, (11.2) 式, すなわち,

$$\begin{tikzcd}
 & & \text{アプリオリ} + \text{ポステリオリ (経験知)} \\
\boxed{\text{カント以前}} \arrow[rr, "\text{観念論化}", "\text{認識論的コペルニクス的転回}"'] & & \boxed{\text{カントの観念論：純理}} \\
\text{(世界が先で, 認識が後)} & & \text{(認識が先で, 世界が後)} \arrow[d, "\text{言語論的転回}"] \\
 & & \text{言語ルール} + \text{コペンハーゲン解釈} \\
\boxed{\text{量子力学}} \arrow[rr, "\text{言語化 (1.1 節の (1.2) 式)}", "\text{言語論的コペルニクス的転回}"'] & & \boxed{\text{量子言語}} \\
\text{(世界が先で, 言葉が後)} & & \text{(言葉が先で, 世界が後)}
\end{tikzcd}$$

を見れば，次のようにウィトゲンシュタイン [言語の発見] を加えたくなる.

ウィトゲンシュタインが言語を作らなかったことは残念だったにしても，ウィトゲンシュタインを 言語 (哲学) の発見者 としたい.

11.4 「哲学は進歩する」の系

量子言語に近づくことを「哲学は進歩する」と呼ぶならば,「大筋では哲学は進歩してきた」と結論できる： したがって,

$$\overset{\text{認識論}}{\boxed{\text{デカルト・カント認識論}}} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{\text{進歩}} \overset{\text{言語論}}{\boxed{\text{量子言語}}}$$

である. 極論するならば, すなわち,「相対性理論があれば, ニュートン力学は不要」というような言い方をするならば,

- 量子言語があれば, デカルト・カント認識論は不要

となる. すなわち, ウィトゲンシュタインの「『心』は哲学のテーマになり得ない」と同じ意味で,

- **「心」,「身体」などという言葉は哲学で使うな!**

である.

そうならば,「心身問題」に解答することができる.

11.4.1 心身問題と因果問題

因果問題については注釈 1.1 で述べた. すなわち,

$$\text{「因果問題の解答} \Leftrightarrow \text{言語ルール 2」} \tag{11.3}$$

であった.

最後に, もう一度心身問題 (問題 8.4) を考えよう.

問題 11.5. **心身問題** (=問題 8.4)：デカルトの二元論においては,「心」,「身体」と「物」がキーワードであった. それでは,

- 「心」と「身体」(と「物」) は如何に関係し合っているのか？

である.

解答 11.6. 心身問題の解答[*2] さて, キーワード対応 (主張 1.6)：

[*2] 文献:S. Ishikawa *A final solution to the mind-body problem by quantum language,* JQIS, Vol. 7, No.2 , 150-155, 2017,

$$\text{デカルト (心, 身体)} \xrightarrow[\text{キーワード対応}]{} \text{量子言語 (測定値, 測定器)}$$

を思い出そう．これから次を得る：

$$\begin{array}{c}\text{認識論的心身問題}\\ \boxed{\text{デカルト・カント}}\\ \text{心と身の関係は如何？}\end{array} \xrightarrow[\text{言語論的転回}]{} \begin{array}{c}\text{言語論的心身問題}\\ \boxed{\text{量子言語}}\\ \text{測定値と測定器の関係は如何？}\end{array} \tag{11.4}$$

さて, 最も確固たる二元論的観念論は量子言語なのだから, 心身問題を量子言語の枠組み内で考えることは自然である．と言うより, デカルト・カントの認識論は世界記述法としては不完全で使えない．そうならば，心身問題とは,「測定値と測定器の関係は如何？」を量子言語の枠組みで答えるしかない．そうすると,「測定値」と「測定器」という言葉の使い方は言語ルール 1(測定) に従うのだから,

(C) 心身問題の解答は言語ルール 1(測定：1.1.1 節) で与えられる

である．すなわち，心身問題の解答は

「測定値」と「測定器」の関係は,

- 測定者 (=私) が, ω という**状態**をもつ物 (=測定対象) に対して, **観測量 O** を (または, **測定器 O** で) 測定したとき, **測定値** x を得る**確率**は $P_{\mathsf{O}}^{\omega}(x)$ である．

となる．

////

したがって, 式 (11.3) と合わせて, 次の同値関係が成立する．

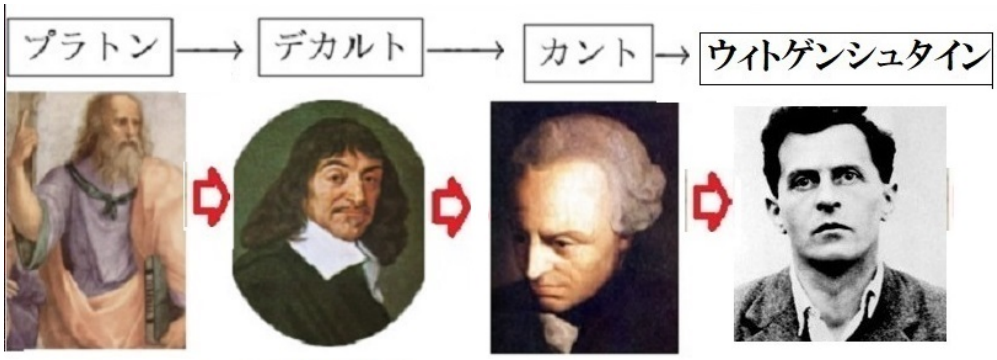
$$\begin{aligned}&\text{二元論的観念論を究める}\\ \Leftrightarrow&\text{量子言語を提案する}\\ \Leftrightarrow&\text{言語ルール 1 と言語ルール 2 を提案する}\\ \Leftrightarrow&\text{心身問題と因果問題を解く}\\ \Leftrightarrow&\text{諸科学を記述する言語を提案する } (cf.\ \text{主張 1.1})\end{aligned} \tag{11.5}$$

となる．

何回もの繰り返しになるが, もう一度まとめると,

要するに, 次の問い掛け：

(D) 西洋哲学の本流の歴史：



は一体なんだたのか？

に対して，「量子言語に近づいている」ことは確実で，しかも上の (11.5) 式を見れば，

二元論的観念論を究めるための進歩の歴史だった

と結論したくなる．すなわち，

である．

そうならば，

(E) その場の思い付きの「二元論・観念論のモデルチェンジ」でも，天才たちの思い付きなので，結果的には，二元論・観念論の意味の明確化になっていた

つまり，

(E_1) メチャクチャにバットを振っても，天才ならばホームランになる

ということなのか，または

(E$_2$) 「メチャクチャにバットを振った」としか, 凡人には見えない

ということなのだろう.

注意 11.7. (i): 心身問題 (「心」と「身体」は如何にして関係し合っているのか？) を科学的に追究することは「ヒュームの 9.7 節」で述べたクリックの方向で興味深いし意義がある. 脳科学・認知科学の進歩によって「心」の意味も徐々に明確になっていくだろう. ただし, 自分にしか感じることができない「心」は科学の対象外で (1.1.2 節:言語的コペンハーゲン解釈), 面白いことが起きることは期待できない. この追究においての最重要は実験であって, 哲学者の出番はないだろう. 脳科学・認知科学の研究者と一般の人たちとの架け橋ぐらいのことはあるかもしれないが,
(ii):心身問題を擬似問題 (「語り得ぬこと」に関する問題) と考えることには一理ある. 「心」などという自己言及的な意味不明なものに関する問題だからである. たとえば, 「神の存在証明」とか「なぜ $1+1=2$ か？」とか「『今』は存在するのか？」などは擬似問題である. 擬似問題 (自己言及的な概念についての問題) は科学的には不毛であるが, 哲学史を振り返ってみると, それなりの一定の役割を果たしたことは本書で繰り返し述べた.

さて, 11.2 節で述べたように,

- 「語り得ること」と「語り得ぬこと」の区分は, 言語に依存する

したがって,

- 心身問題とは,「心身問題」を語り得ることに解釈できるような言語を考えだす問題である

と考える. この方向が本書の提案であって, 結局, 量子言語に行き着く.